c. 大食堂是工作人员用餐的，小食堂是首长用餐的。

（大食堂は社員が食事するところで，小食堂は幹部が食事するところだ。）

d. 王大栓：打女学生的钱，我不要！

（女子学生を殴ったお金はいらないよ！）

小二德子：换换，这块是打男学生的，行了吧？

（変えるよ，これは男子学生を殴ったお金だ，それでいいだろ？）（老舍《茶馆》）

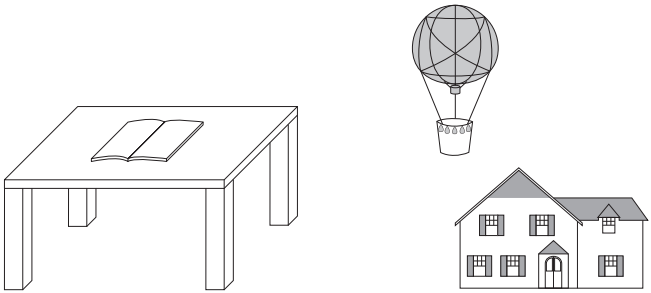
11.4　言語におけるイメージとスキーマ分析

認知的な言語分析において，他に重要な概念として「イメージ」と「スキーマ」がある。

イメージ（image）とは，ある事物もしくは状況が，捉え方や理解の仕方の違いによって――際立っている部分が異なる，視点が異なる，抽象化の度合いが異なるなど――形成される異なる心理的印象である。先に“我送一件毛衣给小李”（私はセーターを李さんにあげる）と“我送给小李一件毛衣”（私は李さんにセーターをあげる）は異なると述べたが，それはつまり，それぞれ異なるイメージを持つことを指している。

イメージについては，「図」（figure）と「地」（ground）の概念に言及する必要がある。イメージの中で際立っている部分を図，際立っていない部分を地という。この対概念は図（27）のゲシュタルト心理学の有名な「ルビンの壺」の視覚実験によるものであり，そのような現象を「図地反転」という。図と地は反転できるが，通常一つの図しか見えない。つまり壺と見なせば，人の横顔と見なすことはできず，人の横顔と見なせば，壺と見なすことはできない。このような現象を「図地分離」という。実際，日常の視覚経験は多くの場合図地分離である。たとえば，（37）の左図では一般的に本を図，机を地として選び，右図では一般的に空にある気球を図，地上の家を地として選ぶ。

(37)

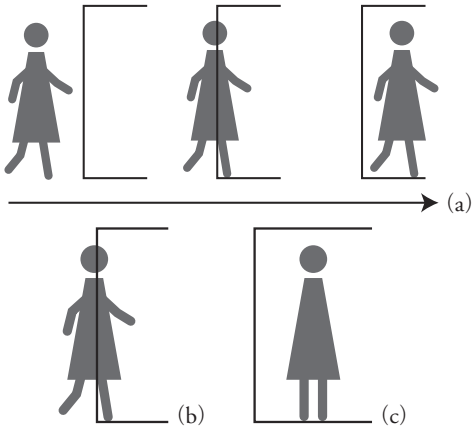


また言語におけるイメージには視点の違いがある。たとえば“大伟坐在莉莉的左边”（大偉が莉莉の左側に座っている）には多義性がある。それは左右の判断は話し手の角度からなのか，大偉の角度からなのか，による違いである。また見ている状況は同じように山の峰と川面であっても，“山峰俯视着江面”（山の峰が川面を見下ろしている）とも“江面仰望着山峰”（川面が山の峰を仰ぎ見ている）とも言える。視点に関しては広義の理解をすることもでき，話し手の立場や期待する方向の違いも含まれる。たとえば本講の初めに述べた“差一点儿”（もう少しで…）形式について，“我差一点儿没跟她结婚”と言うと，この言葉は多義性を持つことになる。もし私が彼女と結婚したいならば，この言葉は実際彼女と結婚したという意味（もう少しで彼女と結婚できないところだった）であるが，もし私が彼女と結婚したくないならば，この言葉は実際彼女と結婚しなかった（もう少しのところで彼女と結婚しないで済んだ）という意味である。また下の（38）では，どちらも“一会儿”（少し）待ったのだが，“就”を用いると話し手の期待する時間は“一会儿”よりも長く，“才”を用いると話し手の期待する時間は“一会儿”よりも短いことになる。比較してみよう。

(38) a. 等了一会儿水就开了。（少し待つと，すぐにお湯が沸いた。）
b. 等了一会儿水才开了。（少し待って，ようやくお湯が沸いた。）

言語におけるイメージには，スキャニングの方法の違いもある。ある複雑な事件を感知する際，スキャニングの方法の違いによって異なるイメージが形成される。スキャニングの方法には「一括的スキャニング」（summery scanning）と「連続的スキャニング」（sequential scanning）が含まれる。一括的スキャニングとは，ある事件の各構成部分についてそれぞれスキャニングした後，最後にまとめて一つの全体概念を形成する方法である。連続的スキャニングは，順番にスキャニングする際，異なる段階の情報の違いに注意しなければならない。スキャニングが進むにつれて，各段階で得られる情報は徐々に増えていく。たとえば以下のような例である。

（39）a. She entered the room.（彼女は部屋へ入った。）
b. into the room（部屋の中へ）
c. in the room（部屋の中で）



（39a）の動詞“enter”（入る）は連続的スキャニングである。時間軸上において，各段階の展開状況は異なっており，「彼女」は徐々に「部屋」に入っていく。（39b）の前置詞“into”（～の中へ）は一括的スキャニングである。過程を展開せず，スキャニングの結果，つまりそれぞれ異なる段階のまとめ

のみを表す。（39c）の前置詞“in”（～の中で）も一括的スキャニングである。スキャニングを反復して行っても，毎回得られる結果は同じである。認知理論は，異なるスキャニングの方法を用いることで品詞の違いを説明できると考える。たとえば，（39）では動詞と前置詞が区別できる。

実はスキーマ（schemas）もイメージの一種であり，人が外界と日常的に交流する中で形成される，簡単で基本的な認知構造である。多くの言語現象はスキーマによって分析することができる。たとえば，下の（40）における不対称の原因は「図―地」スキーマを用いて説明できる。つまり“**A在B旁边／之上／之中**”（AはBのそば／の上／の中に存在する）のスキーマにおいて，Aが図で，Bは地なのである。図は地の上で際立つことで，一層引き立てられる。左側上段の文はこの規則に当てはまる。蚊は動くため，動かないくぎよりも際立ち，島はかたまりとして存在しているため，分散した湖面よりも際立ち，本はかたまりとして存在しており，また移動することができるため，机よりも際立つ。（40a_2／b_2／c_2）はこの規則に反するため，不自然に感じられるのである。比較してみよう。

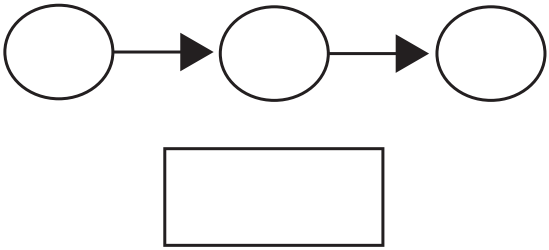
（40）a_1. 蚊子在那颗钉子旁边。（蚊はあのくぎのそばにいる。）
a_2. ?钉子在那只蚊子旁边。（くぎはあの蚊のそばにある。）

b_1. 小岛在湖的中央。（島は湖の中央にある。）
b_2. ?湖在小岛的周围。（湖は島の周りにある。）

c_1. 书在桌子的上面。（本は机の上にある。）
c_2. ?桌子在书的下面。（机は本の下にある。）

スキーマには動的なものもある。前に場所方位スキーマ“在…之上”（…の上で）は静的なものであると述べた。もしも言語を使って気球が家の上を通過したことを表すなら，それに関係するスキーマは動的な“在…之上经过”（…の上を経過する）であり，以下のような図で示すことができる。

（41）



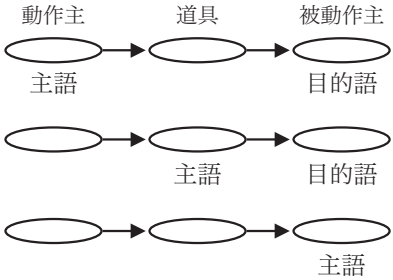
（41）のスキーマは三つの関連する成分から形成されている。一つは運動中の図であり，○によって表され，ここでは気球である。もう一つは参照体としての地であり，長方形で表され，ここでは家である。最後の一つは図が地と相対的に運動するルートであり，矢印を持つ水平な線で表される。図の中では，図がルート上で経過した三つの段階を示している。ミサイルが飛行するルートをトラジェクトリーと言うため，このようなスキーマにおける図を「トラジェクター」（trajector），地を「ランドマーク」（landmark）と呼ぶこともできる。「トラジェクター―ランドマーク」の対概念は「図―地」の具体的な現れと見なすことができる。ある研究者はこのスキーマの基本形式と変異形式を用いて，英語の前置詞“over”の多義性について統一的な説明を与えた。たとえば，

（42）a. The plane flew over.（飛行機が上を飛んでいった。）
b. Sam drove over the bridge.（サムは橋を車で通過した。）
c. The city clouded over.（町が雲で覆われた。）
d. The fence fell over.（フェンスが倒れた。）
e. Hang the picture over the chimney.（写真を暖炉の上に掛けなさい。）

（42a）ではランドマークは明確に言われていないが，一般的には話し手のいる位置をランドマークとする。（42b）ではトラジェクター（車）とランドマーク（橋）が接触している。（42c）ではトラジェクター（雲）とランド

マーク（町）の大きさや形状が似ており，近くにあり，トラジェクターがランドマークを覆っている。（42d）ではトラジェクター（フェンス）とランドマーク（地面）が合わさって一つになっている。フェンスの頂部がトラジェクターであり，あるルートに沿って倒れ，フェンスの底部はまた参照体でもある。（42e）において運動ルートは水平ではなく，下から上へ動き，最終的にはトラジェクター（写真）がランドマーク（暖炉）の上に到達する。

言語のスキーマ分析には「ビリヤードモデル」や「舞台モデル」も含まれる。ビリヤードモデル分析とは，主語を際立たせる一つの方法である。中国語では動作主，被動作主，道具，感情主など多くの名詞成分が文の主語になれる。認知理論では，これらの異なる意味タイプの名詞も，認知の「プロトタイプ役割」だと考える。役割と役割の間は離散的な関係ではなく，一つの連続体を呈している。言語構造において，どの役割を選んで文の主語とするのかは，まるでビリヤードをするかのようである。それぞれの球が実体を表し，一つの球がエネルギーを持つと，別の球と接触した時にエネルギーを伝え，また受け入れられる。少し複雑な状況は，二つ目の球がまた三つ目の球にぶつかり，そこから一つの動作連鎖が形成される。下の（43）の文は一つの動作連鎖を含んでいる。動作連鎖が動作主（李さん），道具（石），被動作主（窓）という三つの役割に関係する時，どの役割を主語にするかは，実は動作連鎖の初めの実体から終わりの実体まで順に選択していく。通常，当然ながら最も際立つ動作主を主語とし，被動作主を目的語とする。前に述べた場所方位スキーマに変異体があるのと同じように，動作連鎖スキーマにもさまざまな変異体があるため，動作主が際立たない時は，道具を選んで主語とし，道具も際立たない時は，被動作主が主語となる。比較してみよう。



(43) a. 小李用石块砸碎了窗户。
(李さんは石で窓を割った。)

b. 石块砸碎了窗户。
(石が窓を割った。)

c. 窗户砸碎了。
(窓が割れた。)

舞台モデル分析は主語を際立たせる，さらに進んだ方法である。スキーマを一つの舞台だとすると，動作主，被動作主，道具が舞台上で表すプロトタイプ役割が必要となる以外に，時間，場所などの場面役割も必要になる。場面役割の顕著度は，一般的にプロトタイプ役割よりも低い。しかし同じように場所であっても，あるものはプロトタイプ役割であり，またあるものは場面である。

(44) a. 小李在巴黎学美术。(李さんはパリで美術を学ぶ。)
b. 小李住在巴黎。(李さんはパリに住んでいる。)

(45) a. Mary swam in the Channel.(メアリーはドーバー海峡で泳いだ。)
b. Mary swam across the Channel.
(メアリーはドーバー海峡を泳いで渡った。)
c. Mary swam the Channel.(メアリーはドーバー海峡を泳いだ。)

上の(44)における場所詞“巴黎”(パリ)は，(44a)では背景場面だが，(44b)ではプロトタイプ役割である。(45)の“the Channel”(ドーバー海峡)は，(45a)では背景場面，(45b)では際立っている場面で，被動作主に近いもの，(45c)では被動作主となっている。よって顕著度は相対的な程度問題であることが分かる。ビリヤードモデルにおいて，動作主と被動作主を相対

的に言うと，動作主が図／トラジェクター，被動作主が地／ランドマークである。舞台スキーマにおいて，役割と場面を相対的に言うと，役割が図／トラジェクター，場面が地／ランドマークである。場面役割（たとえば場所）が特に際立っている時には，主語になることもできる。たとえば，中国語の“台上坐着主席团”（壇上に議長団が座っている）はまさにこの状況である。

フレームとは具体的な認知モデルもしくは経験スキーマであり，一般的にある場面と関係する。このことは“偷”（盗む）と“抢”（奪う，襲う）の構文を使って説明することができる。英語の“steal”（盗む）と“rob”（奪う）は類義語であり，文を作る際には，どちらも三つの名詞成分「盗んだ／奪った人」，「盗まれた／奪われた人」，「盗まれた／奪われたもの」とつながりがある。しかし“steal”の文において，盗まれたものは近目的語で，盗まれた人は前置詞によって引き出される遠目的語である。“rob”の文では反対に，奪われた人は近目的語で，奪われたものは遠目的語となる。一方，中国語の“偷”（盗む）と“抢”（奪う，襲う）の構文では，盗まれた人，奪われた人ともに近目的語にも，また遠目的語にもなれる。盗まれたもの，奪われたものも近目的語にも，また遠目的語にもなれる。比較してみよう。

(46) a_1. Tom stole 50 dollars from Mary.（トムはメアリーから50ドル盗んだ。）
a_2. *Tom stole Mary of 50 dollars.

b_1. Tom robbed Mary of 50 dollars.（トムはメアリーから50ドル奪った。）
b_2. *Tom robbed 50 dollars from Mary.

(47) a_1. 张三偷了李四50块钱。（張三は李四から50元盗んだ。）
a_2. 张三从李四那儿偷了50块钱。（張三は李四から50元盗んだ。）

b_1. 张三抢了李四50块钱。（張三は李四から50元強奪した。）
b_2. 张三从李四那儿抢了50块钱。（張三は李四から50元強奪した。）

しかし，より多くの事実を考察すると，英語と中国語の“steal／偷”と“rob／抢”の構文にはそれぞれ共通の違いがあることに気づく。それは“steal／偷”の後ろは「被害にあった人」のみということはできないのだが，“rob／抢”ではまさに正反対である。

(48) a_1. *张三偷了李四。（張三は李四を盗んだ。）
a_2. *张三把李四偷了。（張三は李四を盗んだ。）
a_3. 张三偷了50块钱。（張三は50元盗んだ。）

b_1. 张三抢了李四。（張三は李四を襲った。）
b_2. 张三把李四抢了。（張三は李四を襲った。）
b_3. ?张三抢了50块钱。（張三は50元強奪した。）

(49) a. *They stole the boy.
b. They robbed the boy.（彼らは男の子を襲った。）

上述の英語と中国語の構文の差異，また英語や中国語そのものの内部での差異に対して，もしも先に議論した結合価分析を用いて，“偷”，“抢”はどちらも三項動詞で，三つの意味役割である動作主（盗んだ／奪った人），被動作主（盗まれた／奪われたもの），被害者（盗まれた／奪われた人）と結びつく，と説明するだけならば，明らかに十分ではない。しかし，認知理論の観点に基づくと，事件フレームにおいて，動詞の意味はいくつの，どのような種類の意味役割と結びつくのかが明らかになるのみならず，関係する意味役割の際立ち方についても明らかになる。認知的に言うと，窃盗事件において，盗まれた／奪われた人が受けた損害が大きければ大きいほど際立ち，盗まれた／奪われたものが多く，貴重であればあるほど際立つ。“偷”と“抢”は動作主，受け手，被害者と関係があるが，それぞれ意味役割の際立ちに違いがある。一般的に，“偷”（盗む）の場合，盗んだ人と盗まれたものが際立ち，盗まれた人は相対的には際立たない役割である。“抢”（奪う，襲う）の

場合，奪った人（襲った人）と奪われた人（襲われた人）が際立ち，奪われたものは相対的には際立たない役割である。この違いは（50）のようになる（太字は際立っている役割を表す）。

（50）a. 偷：

［**盗んだ人（動作主）**　盗まれた人（被害者）　**盗まれたもの（被動作主）**］

b. 抢：

［**奪った人（動作主）**　**奪われた人（被害者）**　奪われたもの（被動作主）］

このような違いは，実はまさにわれわれの生活における経験の一部分である。ともに被害者ではあるが，強盗された人の受けた損害は，窃盗された人よりも大きい（法律上も強盗罪は窃盗罪よりも重い）。誰かが財布を盗まれた時，人々はまずその人にいくら盗まれたのかを聞くが，誰かが強盗に襲われた時，人々はまずその人がけがをしていないかを気にかけるだろう。意味役割の際立ちの差異を用いることで，“偷”と“抢”の構文の違いを十分に説明することができる。（46）の英語の状況は次のように説明できる。際立っている役割と動詞の関係は密接であるため，近目的語となり，際立っていない役割と動詞の関係は遠いため，遠目的語となるのである。認知上における根拠は，近くのものは遠くのものよりも際立ち，二つのものは近ければ近いほど関係が密接であることである。（48／49）の中国語と英語の状況は次のように説明できる。際立っていない役割はなくても良く，文法表現形式がないのに対して，際立っている役割は隠すことができず，文法表現形式が必要となる。認知における根拠は，見えるものは見えないものより際立つことである。上の4組の文の状況（（47）を含む）については，上述の二つの規則に基づいた，より抽象的な説明ができる。ある言語の文において，もし際立っている役割が遠目的語になれるならば，際立っていない役割も遠目的語となれるが，その反対は成立しない。ある言語の文において，もし際立っている役割を省略できるのならば，際立っていない役割も省略できるが，その

反対は成立しない。英語と中国語の“steal／偷”と“rob／抢”の対立例を合わせて見ると，このような規則を反映しているのである。

主要参考文献：

崔希亮（2001）《语言理解与认知》，北京语言文化大学出版社。
崔希亮（2002）认知语言学 ：研究范围和研究方法，《语言教学与研究》第5期。
戴浩一（1987）以认知为基础的汉语功能语法，《功能主义与汉语语法》，北京语言学院出版社。
屈承熹（1998）汉语功能语法刍议，《面临新世纪挑战的现代汉语语法研究》，山东教育出版社。
沈家煊（1987）“差不多”和“差点儿”，《中国语文》第6期。
沈家煊（1993a）句法的象似性问题，《外语教学与研究》第1期。
沈家煊（1993b）语用否定考察，《中国语文》第5期。
沈家煊（1994a）“好不”不对称用法的语义和语用解释，《中国语文》第4期。
沈家煊（1994b）正负颠倒和语用等级，《语法研究和探索（7）》，商务印书馆。
沈家煊（1995）“有界”和“无界”，《中国语文》第5期。
沈家煊（1998）《不对称和标记论》，江西教育出版社。
沈家煊（1999）认知心理和语法研究，《语法研究入门》（吕叔湘等著），商务印书馆。
沈家煊（2002）汉语认知语法研究，第1届中国语言学暑期高级讲习班讲稿，北京大学。
沈阳（1996）关于“大＋时间词（的）”，《中国语文》第3期。
石毓智（2000）《语法的认知语义基础》，江西教育出版社。
袁毓林（1998）《语言的认知研究和计算分析》，北京大学出版社。
张伯江、方梅（1996）《汉语功能语法研究》，江西教育出版社。
张敏（1998）《认知语言学与汉语名词短语》，中国社会科学出版社。
张敏（2000）第二次认知革命与认知语法，《面临新世纪挑战的现代汉语语法研究》，山东教育出版社。
赵艳芳（2001）《认知语言学概论》，上海外语教育出版社。
朱德熙（1982）《语法讲义》，商务印书馆。
朱德熙（1990）《语法丛稿》，上海教育出版社。